



Monthly Theme

バウハウスを彷彿させるクルマ好きの医療施設

シャープな鉄骨&ガラスの開口と落ち着いた塗り壁のコントラスト。
単なるインダストリアルイメージから一歩抜け出した、
これぞアーリーモダンの新境地です。

第一次世界大戦後のワイマール共和国時代に設立された美術学校『バウハウス』が設立されて今年で100周年になります。このバウハウスとは、ドイツ工作連盟という建築家や芸家のグループが設立したもので、機能だけの追及を飛び越えて、美しさや洗練の領域まで踏み込んだ世界観を確立しました。言わば今日の良質な工業デザインの先駆けをなすものです。惜しむらくは1933年、ヒトラーのナチス党が政権を奪取するや否や弾圧され廃校になったことです。しかし、今でもデッサウというベルリンから100km南に位置する小さな町に、その校舎の建物が大切に保存され、「デザインとは何か？」を問いかけてつづけています。

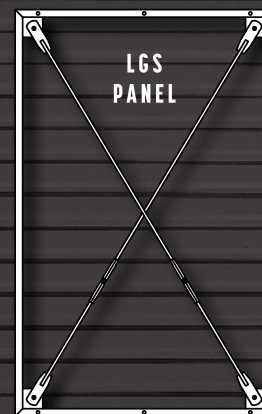
設計中の実際例をご紹介します。この建物は医療系の関連施設と事務所、そして立体駐車機械を持つ重層ガレージで構成されています。何と言っても印象的なのは、ファサードのガラス開口とガレージ部分の塗り壁のコントラストです。シャープなスチールサッシのラインと落ち着いた塗り壁の対比。剛と柔。その二つの要素の間に生まれる独特の洗練。生きる喜び。中央に位置する立体中庭が、中間領域となつてこの二つの要素を繋ぎます。

アルミサッシ全盛の現代において、すでにこの素材感主義のモダニズムは表現することが難しいものです。しかし、パネル構造を採用するデイトナハウスは、スチールサッシを構造パネルに接続して成立させることができるので、リージナブルな価格で、アーリーモダンなイメージを再現することが可能です。

デイトナが提案する
新しい建築のカタチ

DH×L
DAYTONA HOUSE×LDK

CASE 36



×
54
PANELS

What's DAYTONA HOUSE ?

デイトナハウスを構成するのは、LGSと呼ばれる軽量鉄骨のパネルで、厚さ3.2mm、幅12.5cm、厚み5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅180cm、縦270cmの長方形に溶接して製作しています。対角線のクロスしたパーツは、「ブレース」と呼ばれる筋違いで、力の伝達を受け持つ大切な役割を持っています。「柱」と「梁」と呼ばれる縦と横の部材を使って軸組を作っていく一般的な建築とは違って、デイトナハウスはこのLGS パネルを連結することで住宅、ガレージ、別荘、店舗、マンションなどの様々な建築を可能とする、全く新しいカタチのシステムなのです。つまりこのLGS パネルを使った建物全てがデイトナハウスと言う訳です。パネルの枚数を数えるだけで、建築の広さ、およその予算がイメージできる分かります。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感が醸し出すハードボイルドな空間のテイストも持ち味です。

www.daytona-house.com

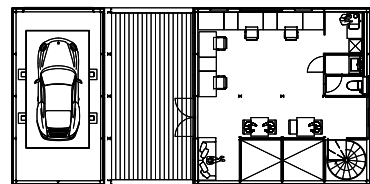
① INFORMATION
LDKinc.

代表: 玉田敦士
www.ldk.co.jp
03-6228-4933

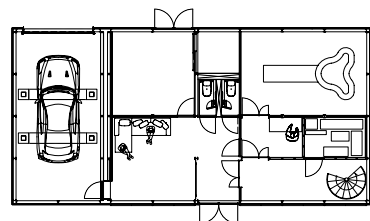
デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。

構造的に均整のとれた奥行き4スパン×間口3スパンを二つ繋げて、さらに階高の違う特殊パネル構造の立体駐車場部分をエキスパンションジョイントで連結させたプランニング。外壁は高性能のフェノール系断熱材ですべて包みこみ、開口部にはPS社のベリメーターヒーティングを完全装備するなど、居住性は現代の技術をフル活用しています。

FLOOR PLAN



2F



1F



2Fのルーパバルコニーを望む。2Fの事務スペースからガラス面で解放された屋根つきの広いバルコニー。この余白が、建物の落ち着いた演出してくれます。屋根を支えるトラスのリズム感や、垣間見えるガレージの愛車のシルエットも秀逸です。夜の演出にも一役買ってくれることでしょう。

Wood Deck

建物の裏側に回って、ガレージスペースの開口部を望む。鉄骨パネルの高さの変化を最小限の変化にとどめ、コンクリート基礎を約1.3m高基礎にして立体駐車場を成立。上段のクルマの表情がちらりと見えるようにフィックス開口を設定しているところがデイトナハウスならではの趣向です。

Exterior

Photo/Takahito NAITO Text/Atsushi TAMADA



GARAGE

1Fは愛すべきVWタイプIIとミニクーバーの居場所。ガレージ空間は左右にそれぞれあり、息子さん達のバイクもここに眠る。まさに2世代ガレージ。鉄骨フレームに共鳴する愛車。その有様を毎日眺めているだけでも、静かに脳細胞は活性化されているのです。



LIVING & DINING

2Fはリビング&ダイニングの空間。中央にガラス張りの螺旋階段を挟んで左右にそれぞれレイアウト。空間はチャコールグレーに統一され、床はモルタル風のPタイル張り。全面開口の窓の外には、武蔵野の現生の樺の緑が借景になっています。壁に掛ける絵や写真、棚のディスプレイ、床のラグなどが鉄骨骨格と呼応して、空間の表情は実に豊かに変化します。

鉄骨との相性抜群なPS社ラジエーター冷暖房



この家の冷暖房はPS社のラジエーター冷暖房〔HR-C〕を採用しています。螺旋階段の両側にそれぞれルーバー上に設定されています。鉄骨との相性は抜群。大開口は冬場対策として、同社のベリメーターヒーターを採用。特別な空気が流れる家なのです。

オリジナルの米軍基地風門扉

『ジュラシック・バタフライ』

この家ではデイトナハウスとソルトシェイカー社が共同で開発したオリジナル門扉を採用しています。米軍基地風のゲート。エキスパンドメタルの金網をフレーミングして亜鉛溶融メッキで防錆処理した武骨な一品。同様にフェンスもこの仕様を連続させています。建物のアーリーモダンなガラス開口とのコントラストが絶妙なのです。



OWNER / 東京都中野区 村田邸

愛した場所に築く“終の棲家”

子供の頃から住んでいる町で、長年愛してきたクルマと住む。老後と言うと、ついつい郊外での別天地を想像しがちですが、むしろ深く町に沈む。デイトナハウス×LDKと共に再構築するアクティブな隠居＝リタイアメントライフの実例をご紹介します。

デイトナハウスの
ある暮らし

Life⁰²with
DAYTONA HOUSE×LDK



年齢が60代間近に差し掛かっていると、リタイア後の生活のことが現実味を帯びてきます。周りの同世代の友人も、皆そのことを口に出し始めます。今まで都会で満員電車で押し込められても我慢してきた会社勤めの人ならば、思わず自然環境の豊かな土地に終の棲家を——などと考へがちです。でも知らない土地で気候も生活環境も変化するわけですから、現実的にはクリアしなければならぬ問題も山積みです。何しろこの先の人生も結構長いのです。

だったら他にどんな選択肢があるのでしょうか？ そのヒントとして、今回は東京に長年住んでおられるご家族の建て替え計画を、デイトナハウスのコンセプトで仕上げた実例をご紹介します。

東京都中野区。この家の施主は子供の時からこの場所に住んでいて、親の世代が建築した良質な木造家屋を引き継ぐ形でここで生活していました。ご家族はご夫婦と、すでに成人された子供さん4名の6人家族です。それと大事に乗っているVWタイプIIとミニクーバー。長年住み慣れた土地と、ずっと愛着を持ち続けてきたクルマたち。この関係性を変化させないまま、会社勤めの時とは違う第二の人生にスイッチしていく。アクティブな隠居。そのスバイスとしてデイトナハウスの鉄骨露出の建築が選ばれました。受動的でもなく、かといって過度に能動的でもない、いわば、中動態とも言えるニュートラルな生活スタンス。それを下支えする環境として、虚飾がなく、構造体

という、必要がそのまま空間を構成しているデイトナハウスが適任だったそうです。「リタイアメントライフに差し掛かるとき、バランスの良い刺激として、デイトナハウスの骨組みがしつくりきたんです」とこの家の施主は語ってくれました。実に嬉しいことです。鉄骨の骨組みは、時間帯や季節の移り変わり、光の当たり方などによって、様々な表情を見せてくれます。毎日が空間の再発見の連続。その中道般的な刺激を感じていただきながら、アクティブな隠居。をどうぞ元気で続けて行っていただきたい。心からそう感じました。

ENTRANCE

1Fから3Fまで空間を貫くオリジナルの分解式螺旋階段「ダイナソーボーン」。言わばこの家の中心＝大黒柱として、家族のテーマや時代のテーマを変わることなく繋いでいく。家族がそれぞれ帰宅するとき、この階段を昇降しながら空間全体への長年の愛着が増幅するマットな質感がウリの鋼鉄製の逸品です。

